

新しい敬語

美しいことば

大石初太郎

外山滋比古

寿岳章子

米田武

西村秀俊

新しい敬語美しいことは

定価 九八〇円

昭和五十八年十月十一日 初版第一刷発行

著者

大石初太郎 外山滋比古

寿岳章子 米田 武 西村秀俊

出版者

相賀 徹夫

発行所

株式会社小学館

東京都千代田区一ツ橋二一三一

郵便番号一〇一

電話(編集)〇三一二三〇一五六六二

(製作)〇三一二三〇一五三三三

(販売)〇三一二三〇一五七三九

振替 東京 八二二〇〇番

印刷所

中央精版印刷株式会社(本文)

町田印刷株式会社(オフセット)

・造本にはじゅうぶん注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。
・本書の一部または全部を無断で複写複製(コピー)することは、著者および出版者の権利の侵害になりますので、あらかじめ小社あて許諾をお求めください。

© 1983 H. OISHI, S. TOYAMA,

A. JUCAKU, T. YONEDA, H. NISHIMURA

Printed in Japan

ISBN4-09-390054-X

日本語シンボジウムⅧ

新しい敬語

美しいことは

大石初太郎
外山滋比古
寿岳章子 小学館
米田 武
西村秀俊

はじめに

朝日新聞社主催、小学館協賛による「日本語シンポジウム」は、日本語の現状と未来を考える集いとして、好評のうちに回を重ねている。これは、昭和五十八年四月三日、東京・新橋のヤクルトホールで開かれた第四回シンポジウム「美しいことば——新しい時代の敬語——」の全記録である。

いま日本語をめぐって、そのあまりに急激な変化を憂う声が高まっているが、最も問題にされることの多いのは「敬語の乱れ」についてであろう。敬語は、日本人の社会生活の秩序を支えてきた暗黙の規範体系ともいえる。それだけに、これが乱れてきたという実感は、たんに言葉がきれいとか汚いとかの次元を超えて、人びとに苦痛と不安を与えているようにみえる。

しかし一方で、社会生活のありようが変われば敬語も変わらざるをえないのも事実である。日本語に国際語としての機能をもたせてゆく必要もあるとすれば、煩雑にすぎる敬語の存在をそのままにしておいていいか、という問題も出てくる。いたずらに敬語の乱れを嘆き憤るのではなく、新しい時代にふさわしい敬語とはどのような言葉なのかを、積極的に探りあてる努

力をしてみよう——これが、今回のシンポジウムのねらいであった。

第一部では国語学者・大石初太郎氏が「形より心の敬語」と題して講演し、新しい時代の敬語のあり方について、きわめて明晰な見解を述べた。つまり、敬語を「民族の美風」とか「思いやりという国民性の発露」とかいって、過剰な思い入れをするのは、敬語成立の歴史的経過からすると事実と反している。形式としての敬語は、むしろ簡素化してゆくのが自然であって、それよりも他人への気配り、声の使い方、態度、身ぶりまで含めた言語行動そのものにこそ「広義の敬語」を求めるべきではないか、というのである。

その説得力に満ちた論旨は、聴衆に深い感銘を与えた。ぜひ本書に収められた記録で、氏の説くところを玩味していただきたいと思う。

第二部では、外山滋比古、寿岳章子、米田武の三氏による討論を通して、これからの時代における「美しいことば」とは何か、「新しい敬語感覚」はどのようなものであるべきかを探った。それぞれ独自の視点に立つ各氏の活発な発言が、ときに斬りむすび、ときに一致しながら、知的興奮を盛り上げていった。

そして、特筆しておきたいのは、その討論が終始、明るい笑いを誘いつつ進行したことである。敬語をめぐる論議は、とかく悲憤慷慨調になりやすい傾向もあるが、ここでは時代とともに変わる「生きもの」としての言葉の面白さを、楽しみながら分析しようというゆとりを感じ

られた。

事後に、当日の参加者から寄せられたアンケート調査の結果をみても、この点が最も好感をもって受けとられたようである。まさしく大石氏の説く通り、言葉の快不快は、それを語る人の心のありようにかかっているのであらう。討論の内容もさることながら、その雰囲気で「言葉」を交わし合う行為の何であるかを感じさせてくれるシンポジウムになったように思う。

シンポジウムの進行役をつとめて

西村 秀俊

新しい敬語
目次

はじめに——西村秀俊——1

第一部

形より心の敬語——大石初太郎——

敬語のいろいろ——15

問題敬語とは——26

敬語の簡素化——49

日本人と敬語——61

第二部

新しい敬語感覚——討論会から——

社会の変化と敬語の感覚——83

敬語の美しさ

——だれが、だれに、何を話すか——89

現代の敬語の乱れの要因——95

敬語は何のためにあるのか——106

敬語の過剰な使用は耳ざわり——117

人間関係と敬語の使い方——134

言葉の地域差と文化——147

言語生活と敬語の役割——163

美しい日本語

——新しい敬語感覚——174

討論参加者紹介——8

大石初太郎

●大石初太郎おおいしはつたろう
一九一一年静岡県生まれ。東京文理科大学卒。文教大学教授。国立国語研究所名誉所員。国語学会、日本言語学会会員ほか。著書「話しことばの性格」(光風出版)、「話しことば論」(秀英出版)、「新選国語辞典」(共著)(小学館)ほか。

外山滋比古

●外山滋比古　とやま しげひこ
一九二三年愛知県生まれ。東京文理科大学卒。東京教育大学助教授を経て、お茶の水女子大学教授。
著書「日本語の論理」「日本語の個性」(中央公論社)、「知的独創のヒント」「変わる日本語」(共著)(講談社)ほか。

寿岳 章子

●寿岳章子　じゅがく　あきこ

一九二四年京都府生まれ。東北帝国大学卒。京都府立大学教授。国語学会、計量国語学会会員。著書『レトリック』（共文社）、『女は生きる』（三省堂）、『日本語の裏方』（講談社）、『暮らしの京ことば』（朝日新聞社）ほか。

米田 武

●米田 武　よねだ　たけし

一九二七年東京都生まれ。早稲田大学卒。NHK総合放送文化研究所放送用語研究部長を経て、富士ゼロックスシステム開発部部長部員。著書『話し言葉』（文化庁）、『日本人と話しことば』（日本放送出版協会）ほか。

司会

西村 秀俊

●西村秀俊　にしむら　ひでとし

一九三五年香川県生まれ。早稲田大学卒。朝日新聞論説委員。

装幀—荒川じんべい
イラスト—川名 京

第一部

形より心の敬語——大石初太郎

敬語のいろいろ

心のこもった敬語、こもらない敬語

「形より心の敬語」という題で一時間半ほどお話を申し上げます。

上^{うへ}辺の形だけきちんと整っていて、心のこもっていない、そういう敬語よりも、多少形のほうは整っていなくても、本当に気持ちのこもっている、心のこもっている敬語が上等である、本物であるということは言うまでもないことだろうと思います。これは言葉の生活上の道義の問題だと思っています。

「いんぎん無礼」という言葉があります。非常に丁重な言葉遣いをしているけれども、何となく高慢な態度で、人を小ばかにしたような態度である。こういうのをいんぎん無礼と言いますが、要するに、上等な敬語を使って、自分に威厳をつける。そして何か高慢で相手を見くだしているというようなものですね。これははなはだけしからん。